

ななくり

The goal of our education is to clear 70 points in total

田迎小学校 学校だより

文責 藤本

第 5 号

2021.09.06



割合的思考法と積極的道德

人の論理的な考え方には「**積算的思考**(たし算・ひき算)」と「**割合的思考**(かけ算・わり算)」があります。

積算的思考とは、物事を単純にたしたり、ひいたりすることで判断することです。例えば、比較するとき、「どちらがどれだけ多い」「これまで〇件の実績がある」などという考え方です。

「割合的思考法」とは、何かをもとにしたときの何倍にあたるかを重視して物事を判断することです。野球の打率やワクチンの接種率などがそうです。

この「割合的思考法」は経済学では、きわめて重要な考えになります。身近なところでいえば自動車保険といった保険会社も過去の事故件数、運転者の年齢など膨大なデータを駆使して、保険料などを設定します。

多くのトラックなどを保有する運送会社では、このような自動車任意保険料は莫大な額になります。しかし会社によっては、事故を起こす割合と支払い続ける保険料を勘案してあえて任意保険に加入しない場合もあります。自社の車が事故を起こす確率を割合的に考え、もしも事故を起こしたとしてもその時の損害額が支払い続ける保険料よりも割安になるとの試算からです。

私たちの生活は、このような「割合的思考法」で考えなければ、成り立たないことが多いのです。

「**リスクとメリットの割合**」で物事を決めていくことは、合理的でもあります。

9月からはじまった分散登校も、学級(学年単位)で登校することは、全校的に登校者は減りますが、教室の子供の数を減らないため、感染のリスクを大きく減らすとはいえません。しかし、学級全体で学習や遊びを行うため子供のメンタルヘルス上のメリットは大きいです。

さらに登校する学年を限定し、登校日の間隔を2日以上空けることで万が一PCR検査を誰かが受けることになっても濃厚接触者を限りなく少なくするメリットもあります。(PCR検査における行動履歴は2日前までさかのぼります。)

このことで、陽性者が出ても学級(学年)閉鎖でおさまり、休校という状況を避けやすくなります。

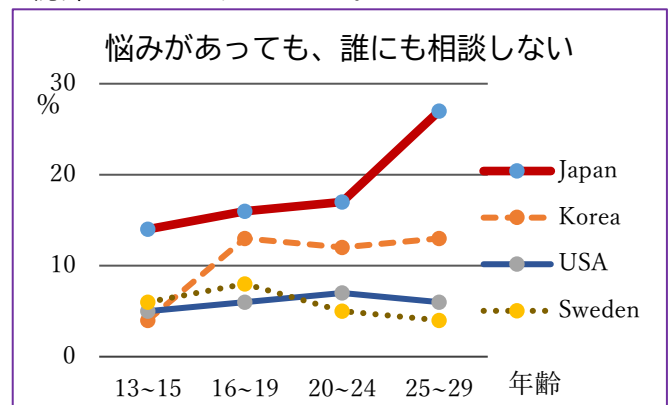
感染症においては、人が生活していく限り感染者を「0(ゼロ)」にすることはできません。ですから、有効な治療薬が開発されるまで、ICT等を活用して「**With corona**」(COVID-19との共存)を進めていくことになります。(学校でも多面的に考え、最善の選択を積み重ね子供たちの成長を確実にしてまいります)

「1か0か」(All or Nothing)の考え方であれば、人は必ずマイナス思考になります。できもしないことやありもしないことを考えつづけ、悩み続けます。「ななくり」のように「70%(7割)でよし」と考えることは、とても大切なことのように思っています。

さて、夏休み明けの9月初めは、子供たちのメンタルヘルスが崩れやすい時期といわれ、子供の様子から目を離さないように文部科学省も通知をしています。

「禍福は糾える縄の如し」ということわざとおり、「よいこともあれば、そうでないこともある」のが人生ですし、今起きていることがずっと続かないのも人生です。

悩みは若者だけの特権ではなく、大人になってもつきることはありません。【我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)】に次のような統計データがありました。



日本は、諸外国に比べ、若い時から人に相談しない割合が高く、それは年齢が上がればさらに顕著になることが示されています。

これは、「人に迷惑をかけてはいけない」という【**消極的道德**】の影響で「相談すると相手に迷惑がかかる」という考えが強いのだと思われます。

日本では「**報連相**(報告・連絡・相談)」を徹底するという呼びかけがあらゆる職場でなされていますが、海外では、当たり前なこと過ぎて、誰も「**報連相**」などは言わないそうです。

「**自分も迷惑をかけるけれども、困っている人がいたら助ける**」という【**積極的道德**】が文化としてあるからです。

例えば、アメリカでは災難や急病で困っている人を善意で助ける場合に、その結果がたとえ失敗であったとしても責任は問われないという法律があります。

このような【**積極的道德**】こそが、グローバルスタンダードとして何をおいても一番に日本に取り入れるべき考え方なのではないでしょうか。

※参考文献【「人に迷惑をかけるな」と言ってはいけない】坪田信貴(SB新書)

